《解説》

現代イランの国民的詩人シャームルー

前田君江

アフマド・シャームルー（一九二五-二〇〇〇年）は、イラン現代詩において、唯一「国民的詩人」と呼びうる存在である。一九五〇年代から七〇年代までのイランの経済成長期と重なる、モダニズム文化の勃興期において、韻律や定型に捉われない自由詩を中心とする「現代詩」は、大きな力をもった。シャームルー自身もまた詩人としての成長期をこの時期に迎える。とはいえ、二〇世紀イランの西欧流知識人たちの創作活動とその受容、そして社会的評価をも視野に入れるならば、「詩」という事象、とくに「現代詩」・「自由詩」と呼ばれた創作ジャンルは、千年の伝統をもつとも言われる古典詩へのアンチテーゼとともに、体制への批判と抵抗をもちあわせることを常に運命づけられていた。それは、のちに、社会主義リアリズムとアンガージュマンが換骨奪胎された、イラン文学流の社会意識として、現代文学を貫く潮流となる。

シャームルーが国民的詩人と呼ばれた要因は、第一に、パフラヴィー王制期、現イスラーム体制（一九七九年～）を通じて、社会派詩人、抵抗詩人として、ひるむことなく創作を続けたことにほかならない。自ら、多数の文芸誌・政治社会誌の編集に携わったほか、生涯に十七の詩集を上梓した（うち一冊は、印刷後に没収、焼却された）。「詩とは生きること」也と高らかに歌った、初期の抵抗詩や、とくに七〇年代の反パフラヴィー王制抵抗運動の高まりと秘密警察らによる弾圧に呼応する形で詠われた政治犯らへの追悼詩が知られるほか、六〇年代に美貌のアルメニア人妻アーイダーへと捧げられた一連の愛の詩なども好んで読まれた。さらに、イラン・イスラーム革命を経た、八〇年代以降の混迷期には、入り組んだ隠喩に満ちた暗示的な作品を多く残している。

第二の要因は、彼が常に自らの詩作に課していた政治性と社会性とともに、これとは一見相反する、彼の詩の比類ない抒情性・音楽性が多くの読者を魅了した点にあると言えるだろう。彼は、自由詩の詩作を進める中で、音節の数合わせ・形（かたち）あわせに過ぎない韻律上の規範を嫌い、これをすべて排した非韻律詩のスタイルにたどりつく。しかし、このときシャームルーが痛感したのが、言葉のリズム（＝音楽性）こそが詩の真髄にほかならないという認識であった。それは、彼の非韻律詩において、流麗な古典散文文体の模倣や、古典詩において韻律技法と共に駆使された子音や母音の呼応も、視覚的な詩行構成などとともに用いたスタイルとして結実する。

八〇年代には、イラン人として初めてノーベル文学賞候補に名が挙げられたほか、一九九〇年にはHuman Rights Watch のFree Expression賞を受賞した。これには、アメリカをはじめとし、ドイツ、北欧などに居住する数十万を超すイラン人知識人らの存在と後押しもあったであろう。彼らの大半は、一九七九年に成立した現イスラーム体制には否定的であり、シャームルーが国内で事実上の文学活動が不可能となった八〇年代、九〇年代には、アメリカやカナダのコミュニティーが彼を招き、ときに数千人規模の「詩のタベ」（詩人による自作の詩などの朗唱会）を行った。

シャームルーは、このほかにも、民俗文化辞典の編纂、欧米文学から日本の俳句まで含めたアジア諸文学の翻訳など、極めて多岐にわたる文芸活動の足跡を残している。